

## 2017年12月10日 礼拝メッセージ

聖書：ミカ書5章2～9節

説教：最も小さいものの中から

はじめに

クリスマスと言えば、世間では24日のイブが特別な日であって、プレゼントを交換してケーキを食べたる日、お酒を飲んで大騒ぎする日、あるいは大好きな人に思いを伝える日と考えられています。

教会はどうでしょう。イエス・キリストのお誕生をお祝いする日として12月25日を定めています。しかし、その一日だけが大切なわけではありません。25日に至るまでの四週の間、主の御降誕を待ち望む期間を過ごします。そういうことで、今朝は主の御降誕を待ち望む待降節の第二週目を迎え、ろうそくに二本目の火が灯されました。なぜこのようなことをするのか不思議に思われるかもしれませんが、そのことを知るためにまずイスラエルの歴史を簡単に振り返っていきます。

### 1 時代背景

#### 1) アブラハム (BC 約 2000 年頃)

イスラエルの歴史は、カナンと呼ばれる神の約束の地と密接に関わっておりますので、そのことに注目して時代を大きく三つに分けて見てみましょう。

まず一つ目はアブラハムの時代です。神はアブラハムをカナンの地に導き、カナンの地をアブラハムの子孫に永遠の所有として与えると契約を結んでくださいます (創世記17章8節)。

#### 2) モーセ (BC1445 年頃)

二つ目の節目はモーセの時代になります。

アブラハムからおよそ五百年経ったときです。イスラエルの民は大きな飢饉があったためにエジプトに移民となって逃れていました。今もそうですが移民は地元の人たちから憎まれ者です。ひどい扱いを受けて苦しむことになる。神はこれをご覧になってイスラエルをあわれみ、モーセを遣わしてカナンの地に連れ戻しました。

#### 3) ダビデ、ソロモン (BC 約 1000 年頃)

そして三つ目の節目はダビデからソロモンの時代です。モーセの時代から五百年ほど経って、ダビデがイスラエルの王となり、一つの国としてまとまります。跡を継いだダビデの息子ソロモンは念願の神殿も建て、イスラエルの絶頂期を迎える。ところがソロモンが亡くなると、イスラエルは坂道を転げるように力を失い、やがて北と南に分裂してしまいます。ちょうどその頃、今のイラクのあたりにアッシリヤという当時最も力を持った国があつて、北イスラエル王国に攻め入ります。それで、北王国ユダの首都があつたサマリヤは紀元前722年に陥落してしまいます。

#### 4) ミカの時代 (BC 約 700 年頃)

今日開いているミカ書は、そんな時代に生きていた預言者ミカが記したものです。5節に「アッシリヤが私たちの国に来て私たちの宮殿を踏みにじる」とか、6節「アッシリヤが私たちの国に来、私たちの領土に踏み込んできたとき」あります。北王国が滅びたように、やがて南王国も同じ運命をたどる。ミカはこのように預言した。人々はこれを聞いて

も、「まさか。大丈夫だ」と思ってミカのことばを聞かない。ところが北王国が陥落してから三十六年後に南王国も新バビロニアによって滅ぼされ、多くの人たちが強制的にバビロンに移住させられるという苦しみを味わいます。

## 2 救いの約束

### 1) そむきの罪のために

しかし神が与えてくださったカナン之地、イスラエルであったはずなのに、どうしてこんなことになったのか。当然だれもか疑問に思います。神は約束を忘れたのでしょうか。いや、忘れたのではない。理由がきちんとある。ミカは語っていました。1章5節。「これはみなヤコブのそむきの罪のため、イスラエルの家の罪のためだ。」具体的に言えば、不正がはびこり、異教の神々を拝み、貧しい者やしいたげられている者たちがないがしろにされている、そういうことをあなたがたは平気でやってきた。それらの罪へのさばきとしてこのようなことが起きてしまいます。

### 2) 救い主を待ち望む

しかしそこで終わりません。6節の最後で「彼は、私たちをアッシリヤから救う」とも語りました。救いはあると語ったのです。でも、現実はどうか。人々は、外国に強制移住させられ、祖国を失います。救い主は現れない。ミカが語った救いの約束は何の根拠もない空想だったのか。そうではない。3節にあります。「それゆえ、産婦が子を産むときまで、彼らはそのままにしておかれる。」

母親は子を産むときに陣痛の苦しみをしばらく味わいます。それと同じように、救い主が来られるまでの間、しばらく苦しみの時

間を過ごさなければならない。でも救い主は必ず来る。しかし、それがいつであるかは語りません。

### 3) ベツレヘム・エフラテ

その代わり救い主はどこから来るについては2節で語ります。「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」

イスラエルの支配者とは、先ほど述べたように異邦人に踏みにじられ、奪われてしまった祖国イスラエルを取り戻し、王となる方を指します。その王となる方は、ベツレヘム・エフラテから出るとあります。ベツレヘムは大昔、エフラテとも呼ばれていたもので、このようにベツレヘム・エフラテと書かれています。エルサレムの南隣にある町で、ダビデの町とも呼ばれています。

### 4) 最も小さいもの

なぜ神は、わざわざ町の名前を教えてくださいなのか、と考えます。政治家であればどうするでしょう。例えば選挙のときの公約とすることを考えてみましょう。「私は皆さんの税金が半分になるように努力します。」この人が選挙で選ばれて議員になり、公約が実現できなかったとしても批判されることはないでしょう。「努力します」と言ったわけですから。でもこれはどうか。「私は二年後までに皆さんの税金が半分になることを約束します。」期限を区切って断言する。もし実現できなかったら大変なことになります。ですから政治家は何かを言うときは、必ず逃げ

道を用意するわけです。

でも神の語り方には逃げ道などありません。救い主が生まれるのはベツレヘムである。逃れようがないくらいはつきり断言する。それだけではない。「その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである」と言って、絶対に変更されたり、取り消されたりはしないとします。

そしてその救い主がどのような方については意外なことを語ります。救い主が神から遣わされてくると聞けば、だれもが想像するでしょう。その方は、天から降りてこられるのではないか。人であれば、高貴なお方として来るに違いない。立派な血筋、家柄から出るに違いない。ところがミカは意外なことを語る。「あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだ。」出て来る所は天からではない。だれも注目しない最も小さい所から出て来る。イエスはナザレで生活していました。「ナザレから何の良いものがでるだろう」ということわざがあったほどの田舎でした。そうしたらどんな問題が起きるか。ナザレのイエスが旧約聖書で約束されていた救い主なのかどうか、見分ける手がかりがない。勝手に誰かが「私は救い主です」と言い張っても、嘘か本当か判断できない。しかし神は本物を見分けるための手がかりを与えます。救い主は必ずダビデの町ベツレヘムで生まれる。

### 3 救い主

#### 1) 約束のとおりに来られた

マタイの福音書2章にこのミカ書の預言が出て来る。詳しいことは来週見ることとなりますが、遠い東の国から博士たちがエルサレムに旅をしてやってきました。エルサレムの町で彼らは叫びます。「ユダヤ人の王とし

てお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」これを聞いて驚いたのがヘロデ大王です。もし本当に将来ユダヤ人の王となるものが生まれたのなら、自分は王の座から引きずり下ろされるということを意味します。そんなことがあってはならない。彼はすぐに専門家を招集し、ユダヤ人の王となるキリストがどこで生まれたのか調べるように命じます。そうすると学者たちは答えました。「ミカ書5章2節にベツレヘムの名前が記されています。キリストはそこでお生まれになると神は告げおります。」

これを聞いた博士たちはベツレヘムに向かい、不思議な星に導かれて母マリヤとともにおられる幼子イエスを拝むことができました。

#### 2) 残りの者・足のなえた者・遠くに移された者

ミカの時代、北王国イスラエルはアッシリヤに攻められ、やがて南王国ユダもバビロニヤによって滅ぼされていきます。人々は、補囚となって強制的に外国に移住させられ、辛酸をなめることとなります。でも4章7節でこう言うのです。「わたしは足のなえた者を、残りの者とし、遠くへ移された者を、強い国民とする。」5章の7節。「そのとき、ヤコブの残りの者は、多くの国民のただ中で、主から降りる露、青草に降り注ぐ夕立のようだ。」

救い主は残りの者と呼ばれる人たちに格別に目を留め、祖国イスラエルに連れ戻す。残りの者とはだれのことか。足のなえた者があります。今の時代でも体に障害を持つ者は、一段低く見られる傾向があります。まして旧

約の時代のことです。足のなえた者は死んだも同然。彼らになにができるか。そう思われていた人たちこそが、主から降りる露、青草にふり注ぐ夕立のように輝く。救い主はまったく目立たない小さな所から出て来ますが、その主は人の目から見れば一番小さな人たちをこの世から集めてくださると語ります。これも意外なことです。

この世界は、健康で、頭が良くて、能力のある者が一番であるという世界です。それでみんな一生懸命がんばってこの世に自分の居場所を確保しようと努力する。しかし全員がそうなれるわけではない。

私は子どものときから、なにか世の中になじめない思いを感じていたように思います。自分の居場所がない、いつも中心から遠くにはじき出されている。そんな違和感を感じながら悩んできたように思います。私だけではなくて、もしかして教会に集まる方は心のどこかに、そんな生きにくさを抱えていたのではないか、と思います。一般の人たちから見れば、私たちは遠くに移された者、残り物と思われてもしょうがないような存在です。しかし聖書によれば、そんな人たちこそが主に招かれている、と言われます。それである日私たちは主に捉えられてクリスチャンになりました。

クリスチャンになったからと言ってこの世に自分の居場所ができたとは思えません。依然として自分の居場所がこの世にないような感じがします。やっぱり自分いるべきところは別の所にあると感じます。だから主が来られるのを待ち望みます。私たちが、こそが本当の自分の場所であると安心できる場所に主が招いてくださる。主が再び来られる日まで、共に待ち望んでまいります。